

旅のなかの異文化像

— 旅の魅力 —

本当の楽園など地上にはないが、それでもほぼ楽園とよべるような所には行ける。どういう手段でかという点、つまり、旅を通じてである。現実の旅であっても、空想の旅であっても、そしてどの国のどの文化でも、いつの時代もそれは変わらない。旅は、我々の人生を美味なものへと変える、いわば調味料のようなもので、おいしい物については人々は喜んで語り合うものである。

私が近年受け持ったゼミのテーマの一つが偶然にも「日本における旅と観光、過去・現在」だった。その時提出された二〇点のレポートのうち印象に残ったものが幾つかあった。ある学生が「日本における観光資源開発への道」というタイトルで書いたレポートで、宮城県丸森町の例を挙げていたが、白幡洋三郎氏の『旅行ノススメ』（一九九六）から引用した箇所があった。ある土地の自然の特性とそのイメージが重要であるという内容だ。例えば日本

では、新婚旅行といえは南方へ出かけるのが常となっている。これに対し、別離を克服する旅は北方へ向かうようになっていく（白幡、一七六頁）。これを考慮し、各地ともどのような客層に最も適応するかを見きわめる必要があるというものだ。

ヨーロッパにおいても明らかに類似の傾向がある。ヨーロッパ北部へ旅するのは大抵憂鬱症の人が夢想家である。物見遊山で一度は行くという人もいるかもしれない。だがアルプス以北に住むヨーロッパ人の場合、休暇というと十中八九南方を選ぶ。しかしヨーロッパでは、新婚旅行だけに限ったことではなく、そうであれば南に行くため毎年結婚し直さねばならなくなるだろう。中世ドイツの皇帝達も、馬に乗ってお供を従え、困難なアルプス峠も何のそのと嬉々として南方へと出かけて行ったものだ。地中海の太陽が健康に良く、リユーマチや痛風に効くと言われていたか

ペーター・パンツァー

らである。アーモンドやオレンジの花も目の保養になった。一部が遺跡として残っているにすぎなくとも古代建築が文化の源に触れるという感覚を与えてくれるからであった。

そして南方旅行を好んだ超有名人と言えばゲーテが思い浮かぶであろう。書齋机でなく馬車の中で仕事をしたとも言えるくらい旅好きだったようだ。晩年は毎年温泉地に出かけて、大抵はカールスバートかマリーエンバートだった。この二ヶ所は有名な温泉地で、さしずめボヘミアの伊香保か有馬温泉といったところだ。

しかし、ゲーテの旅行中最も有名なのはイタリア旅行である。ゲーテの時代には、貴族や裕福な家柄の御曹司達は、生涯に一度教養を深めるためのグラントツアーをするのが常となっていた。その目的地として最も人気があったのが、古代ローマ帝国の中心であったイタリアだった。ヨーロッパ文明の発祥の地を見物するためである。関東の学校の生徒達が日本文化のルーツに触れる為、一度は京都・奈良を訪れるというのに似ている。ただ、その際にケイタイばかりいじくり回していないで、しっかりと目を見開いて見物しなければいけないのではあるが。

長いコートに特別大きな帽子といういでたちで描かれた有名なゲーテの絵を見ると、ヨーロッパ人なら誰でも旅行中のゲーテであることに気付く。ゲーテがローマ滞在中に描かれたものである。実際はローマではこのようなコートなど必要ない。それも寒さに



図1 ボン大学同僚による着
物姿のゲーテのスケッチ

慣れたドイツからやって来たなら尚更である。ローマは一年中温暖な気候であるばかりか、雨が降ることも殆どないからだ。描かれた風景がイタリアであることを示すのは、所々に散らばるローマ遺跡の発掘物と背景に見える町のシルエットによる。コートと帽子は旅のシンボルとも言うべき品である。ここでは多少格好をつけている風でもある。もしゲーテが故郷のワイマールへ帰ってこの格好で市内を散歩などしたら、市民は首を傾げたことだろう。フォン・ゲーテ氏はもしや頭がおかしくなったのではないかと。

実は、最初にゲーテを登場させたのには理由がある。以前、ボンの同僚の一人が「ゲーテは日本人だったか？」という講演をしたからだ。答えはイエス。ゲーテは日本人だった。日本には三つの異なる版のゲーテ全集がある。『ファウスト』の訳本は一〇種類。『若きヴェルテルの悩み』などは四〇種類に及ぶそうだ。繰り返すが、何と四〇種類である。また、銀杏の葉を主題に素晴らしい詩



図2 明治中期の掛軸（作者不明、個人蔵）

を書いたことも有名だ。着物姿のゲーテは北斎か、はたまた豊国の手によるものか……（図1）。

勿論私が研究者として職業柄再調査にあたったところ、ゲーテはやはりフランクフルトで生まれたことを確認した。しかし日本へ旅行したことがあったかどうか、目下のところこの点を否定することはできないが、肯定もできない……。

日本と着物

日本を思わせるもので重要なのは着物である。ヨーロッパから日本へ旅する者すべてにとって、また日本旅行を夢見る者にとつ

ては着物は最も重要と言える。着物と日本はまさに一体だからである。

かつて着物姿の西洋女性を描いた明治時代の掛け軸を見て、この絵の誕生をどう説明したものか首を傾げたことがあった（図2）。日本の紳士が外国人の恋人を描かせたものか？ 或は日本人男性が外国人女性の美貌に感激して、そういう絵がほしいと思ったからだろうか？ とんでもない、どちらも違う。実はこれはとびきり上等で、またお安くはない日本土産だったのだ。きつと横浜や神戸の港には、外国人相手に商売熱心な画家達がいたのだろう。世界中で着物以上に美しい衣装があるだろうか？ それを着る女性が金髪とか赤毛で多少違和感はあるとしても、愛好者にとっては、大した問題ではないのである。

おしやれしたがったのは何も女性ばかりではない。男性にしても同じことで、ある意味では更にエスカレートしていたかもしれない。というのも、外国人男性も日本人の格好で肖像画を描かせることがあったからだ。そうして咎められることなく堂々と大奥に入ってみたいなどと夢見ていたのかもしれない。

ところがこの種の絵に数多く接していくにつれ、描かれた人達の大半は実際日本には行っていなかったのだろうと思えてきた。何故そう思うかというと、それらの絵をよく見ると、頭と身体のバランスや身長や姿勢がどこなく釣り合っていないのが分かる

からだ。というわけで、それらの描かれた人々はヨーロッパなり米国から自分の写真を日本へ送り、数ヶ月後に掛け軸として受け取ったのではないかとほぼ確信している。身体の部分は「レディ・メイド」として予め出来上がっていて、頭と手が「オーダー・メイド」で後から描き添えられたと考えられる。だからバランスがとれていなくても不思議はないのである。画家には写真だけしか与えられていないのだから。しかし自分の肖像画を手にした人々は、細かいことなど気にせず大喜びだったに違いない。

このような掛け軸は土産物としては随分値がはっただろうと思われる。絵葉書の方が文句なく安上がりだっただろう。絵葉書というのは、皆さんにはご想像頂けると思うが、旅の重要な情報源なのだ。実際に体験した旅か、夢に描いた旅かは関係なく、庶民の願望や憧れをそのまま反映する物だからである。

日本と絵葉書

絵葉書の歴史こそ近代旅行の歴史であり、益々狭くなりつつある世界の歴史を物語るものと言えるだろう。蒸気船、鉄道、自動車、飛行機などが全てを可能にした。一九世紀後半には、ヨーロッパで旅行会社や代理店のない町などなかっただろう。ヨーロッパ全土で、またアメリカでも、山々に、遠方の世界漫遊旅行にと

繰り出していくことが始まったのだ。それでも重い腰があらなかったり、費用・時間のない者には、自宅で絵葉書を眺めるという方法があった。絵葉書を手想像をふくらませることができからだ。

絵葉書には、今の時代には想像もつかない意味があった。一九世紀末頃、緊急連絡用に電話を所有できた者はどれだけいただろうか。当時はまだ郵便全盛時代で、大都市では最盛期には一日四回、またそれ以上の配達があったこともあった。朝方葉書を出せば午後には返事が届くので、その晩会う約束もできるという具合だった。現代の携帯電話は、葉書の孫か、ひ孫とも言えるのではないだろうか。

絵葉書は絵本やラジオ、テレビの代わりをしたわけである。多岐にわたる町で絵葉書専門店のない所などなかったのだ。

日本の独文学者、大村仁太郎が一九〇一年にベルリンで二年間の留学生生活を始めた当時の第一印象の一つが、絵葉書文化というものだった。その本山とも言えるベルリンには、どの通りにも沢山の絵葉書屋があったと、それに驚いたこの日本人学生は綴っている。

絵葉書の使用量といったら二百万枚位になるだろうか。その為、絵葉書の製造だけを請け負う特殊産業も誕生したそうで



図3 絵葉書(写真)、プラハ、1908年(個人蔵)

ある。手紙を出す代わりにその種の絵葉書を買ひ、宛先を書いて、自分の消息を知らせる為人々は世界各地へと絵葉書を送るのである。私もならって活用したいと思うすばらしいシステムである。ただそれが実行できないのは筆無精の為だ。

明治二〇(二五年頃、日本で製造されたこの種の絵葉書が、一体どれだけ西洋へと流れ、各地に出回って見せかけの遠方旅行を演出したか、全く信じがたい量になるだろう。今日の日本産業は

ゲームやカメラの
トップメーカーとな
っているが、当時は
絵葉書産業がそれだ
った。手書きで「日
本からご挨拶」と絵
葉書には書いてある
が、実はプラハから
ウィーンへ送られた
ものである。「親愛な
るリズ」と書かれた
ある日本製の絵葉書
には、「午後のお茶を

お茶屋の娘達ととるのも楽しいかもしれませぬ。どう思いますか？ 私は勿論、うす暗い角席であなたと二人きりで飲むお茶の方が嬉しいですが。」とあるが、これはイギリスのボルトン市で投函されたものだった。

それでも日本製の絵葉書だけでは全く足りなかった。今時ヨーロッパやアメリカで、日本レストランがない町など殆どないと言える位に、この世紀末の時代には「和風茶屋」のない大都市など見当たらなかった。勿論、彼等が想像した意味での「和風茶屋」ではあったが。例えばウィーンに存在したような店がそうで、その宣伝文句はこうだった。「市内最大規模で、最も楽しめるオールナイト・ティーハウスには静かな席が沢山、そして日本を夢見させてくれる芸者もいます」。しかし、これは本物の芸者だったのだろうか。

遠方の客も引きつけた特別あてやかなお茶屋が、長年プラハにあった。「横浜」といって、外観も内装もすっかり日本風だった。そして客には本当にいたれり尽くせりで、芸者もいた。ただし生粋のプラハっ子芸者ではあったが。それでも日本の魔力にかなうものはなかった(図3)。

日本ファン意識が高まると、自然と各地で特別な日本フェスティバルが催されるようになった。例えばウィーンで開催された最大のものとしては、一九〇一年五月の花見祭があり、当時の新聞は



図4 絵葉書(写真)、1900年代(個人蔵)



図5 絵葉書、1900年代(個人蔵)

何頁も割いて、こと細かに報道した。三日間の開催期間には五万人もの客が押し寄せた日があり、切符売り場を閉めようと考えた程だったようだ。

広場にはおとぎ話のような美しい日本の町がたっている……桜の花に埋もれて御殿やパビリオンが立ち並び、桜並木が庭園に通じて、カフェー、レストランも見える。小さな気のき

いた売店もあり、愛らしい女性達が各種の飲み物や絵葉書等売っている。日本風茶屋、扇のパビリオン、居酒屋、舟、芝居小屋等々……。

このような日本マジックをしかけたのは誰だったのだろうか。これらの催し物は殆どと言って良い程、福祉の資金集めとしての慈善行事だった。例えばウイーンでは、かの有名な宰相の孫娘メッテルニヒ侯爵夫人が主催したこともあった。政治に関わった人ではないが、その分当時の社交界で采配を振るった人物だった。

この行事期間には絵葉書に描かれた彼女の似顔絵も売られた。輝かしい名前故、それはきつと新聞関係の注目を浴びたに相違ない。当時のある風刺新聞がそれを第一面に載せ、冗談まじりに「芸者女将」と見出しをつけたりした。「いらっしやい、いらっしやい、若い旦那衆」と本文に続く。「娘達が最高の品でおもてなし致し

ます。収益は全て慈善事業に還元されます。」そして若い芸者達も実に一生懸命尽くした。

小ぎれいなパビリオンのまわりでは、色とりどりのバザー品に人々が沸き立っていた。あたかも日本の魔法の町に紛れ込んだかのようにであった。接待役の女性達は競ってかいがいしくサービスに励んでいる。彼女達は皆日本の着物を着ていて愛らしい……。²

ある日刊新聞から引用すると、『日本万歳』を合い言葉にして、殿方全員を日本ファンにしてしまおうと、美しい芸者達は疲れも見せず懸命であった……。とある。着物の着付けに関しては、ウィーン女性達はそれ程達人ではなかったが、それでも「形じゃなくて気持ちだよ」ということで、殿方は満足したに違いない（図4）。

芸者——本物と偽物

これらの話はあまり旅とは関係ないと思われるかもしれないが、実は密接に関係している。旅行には資金と移動する為の足を必要とする。しかし旅の本当の始まりは、まずは頭の中の想像からで

ある。というわけで、着物が似合っているかどうかは度外視して、ご婦人達は好んで日本人としてポートレートを作らせた。時には着物が短すぎることもあった。最初は笑ったが、私が初めて日本の旅館で浴衣を着た時は似たような状態だった。子供は可愛いものでつい頬ずりしたくなるが、日本の子供達がまた特別可愛いので、イタリア人、イギリス人、またはドイツ人の子供芸者を絵葉書に仕立てたりもした。すっかり理想の日本像というものができあがっていて、これはもはや日本ではなく、アダムとイヴの楽園よろしく、罪のない地上の楽園なのだと言っているようだった（図5）。それでもまだ満足しきれないで、年賀状にまでもきれいな日本女性を登場させたりしたのだった（図6）。

不思議なことに、西洋製の絵葉書には日本男性は殆ど登場していない。西洋製絵葉書では日本人口の半分が黙殺され、隠されて、



図6 絵葉書・年賀状、ドイツ、1903年
（個人蔵）



図7 ウィーンで販売された日本製絵葉書（個人蔵）

それこそ差別待遇を受けていたわけである。例外があるのは規則がある証拠で、日本男性の顔はドイツ語の説明文付きでイギリスの出版社から出ている。なぜそうなったかは、社会学者に質問してみなければならぬ。

絵葉書のテーマを終える前に、もう一つ特別な例を紹介しなければならぬ。一九〇一年に出回っていた日本製絵葉書で、上野の東照宮を描いたものがある。葉書に手書きしてある文面は「世界旅行中に、日本からご挨拶を」とあり、署名がついている。これは本当に横浜で投函され、ドイツで配達された。切手と消印が証拠である。ただ、なぜウィーンの子会社のスタンプが押されてい

るのか不思議だった。扇子から着物まで、またお茶道具から日本製絵葉書まで日本製品を幅広く専門に扱っていた会社である。謎解きはこうだ。日本旅行は演出だったのだ。この会社は客に葉書を書いてもらい、それをウィーンから日本へ送っていたのだった。多分まとめて何百枚にもなったことだろう。それらは日本ではらばらに投函された。ヨーロッパの受取人の驚きは大変なものだっただろう。前の日に道で会ったばかりの人から日本旅行の絵葉書が届いたのだから。差出人ではなく、絵葉書が日本とウィーンを往復したというわけである。日本からウィーンに納品され、ウィーンから日本に送付され、再度ウィーンに配達され、計三回もの往復である……（図7）。

日本旅行は旅の最上級

日本への旅行は、一九世紀後半に入り全盛期をむかえる。それ迄特権階級に限られていたことが、蒸気船の発達と共に若い世代にも開かれていった。イタリア旅行に代わって日本旅行を選ぶのが流行ってきたのだ。典型的な例を挙げると、オーストリア・ハンガリー帝国皇太子フランツ・フェルディナントが浮かぶ。彼は一八九三年（明治二六年）に数ヶ月日本に滞在した。これは、当時まだ独身で時間をとれる身分であったことから、明らかにグラ

ンドツアーだった。また主治医が海の空気が身体に良いと薦めたことも理由だった。帰国後は、实际出发前より健康状態が良くなったと言われている。皇太子なので普通の客船に乗る必要はなかった。海軍の船が長崎まで皇太子を送り届け、より抜きの数人が随行員としてこの旅のお供をしたのである。

東京の日本政府迎賓館前に並んだ紳士達の写真がある。公式撮影用に盛装して、いささか窮屈そうである。フランツ・フェルディナントの名はきつとよく知られているだろうが、それは彼にとつて最高の体験の一つであった日本旅行のためではなく、むしろサラエボでの暗殺が第一次世界大戦勃発の引き金となった為である。フランツ・フェルディナント来日時の公式接待係の中には宮内省式部官の三宮も加わっていた。

大公一行の観光旅行は熊本から始まった。更に京都、奈良、琵琶湖等が予定に入っていた。勿論日光見物も必須であった。華厳の滝まで行くには人力車では遠すぎるし大変すぎたので、浦見が滝で我慢しようだ。夏であった為、滝にはあまり水がなかったが。皇太子が帰還後に公開したこの旅行日記を読むのは非常に面白い。第一に彼が日本にすっかり魅了されていること、そして第二に他の作家達と同じく、様々な現象をオーストリアと比較しながら書いている為興味深いのだ。桂川はオーストリア・アルプスの川のようにとか、奈良の正倉院は外見がザルツブルクやチロル

の湿った原っぱに立つ千し草用納屋のようだ等という表現。ちなみにこの日記は、安藤勉氏による翻訳で『オーストリア皇太子の日本日記―明治二十六年夏の記録』というタイトルで二〇〇五年に講談社から出版されている。

前述したように、季節は夏だった。浴衣姿の紳士方はすっかりリラックスしていたに違いない(図8)。

この写真(図9)を一九九九年に東京で開催された日澳交流一三〇周年記念の展覧会に出品しようとしたが、これが日本外務省の検閲で引かかった。日本へ旅行した外国人が日本の慣習を茶化しているようだと言われたが、果たしてそうだろうか。それとも当時の東京のお役人にはユーモアが欠けていたのだろうか。

彼等が日本の正しい挨拶の仕方を練習していたと言うつもりはない。しかし、日本へ旅行する日本ファンが、現地で礼儀にかなった振る舞いをしようとするのを示す例が豊富にあることは確かである。非常に人気を博したある旅行記の挿絵がある(図10)。あるオーストリア外交官の日記である。二人のうち左側は、すぐに気付く人も多いと思うが、アーネスト・サトウである。右側はサトウから細かく指導を受けているような感じのオーストリア人旅行者だ。この外交官も教養旅行中だったが、若い男性のそれとは違って、既に公務員を退官した六〇すぎのそれとしてであった。彼は礼儀正しさを重視していた。富士山への遠足の際、吉

田付近の川で、彼の友達とお供の日本人が当時の標準に従って裸に近い状態で水浴びしている時、好奇心旺盛な女性達を近づけないよう気を配っている様子が描かれている挿絵もある。これらは外交官自らが筆をとったものだ。

まだ他にもある。ヒュブナー男爵という名は多分あまり知られていないだろうし、初めて聞く人も多いかもしれないが、

その父親はよく知られているだろう。彼の父親は、何十年もヨーロッパの政治を牛耳っていたあの宰相メッテルニヒである。ヒュブナー男爵自身も重要な任務についていた外交官であったから、明治天皇の拝謁を賜ったこともあった。それ故、その年大久保、木戸、伊藤、山口の四公使他大勢の役人を伴い、西洋大旅行へ出発することになっていた岩倉公爵にも東京で会っている。

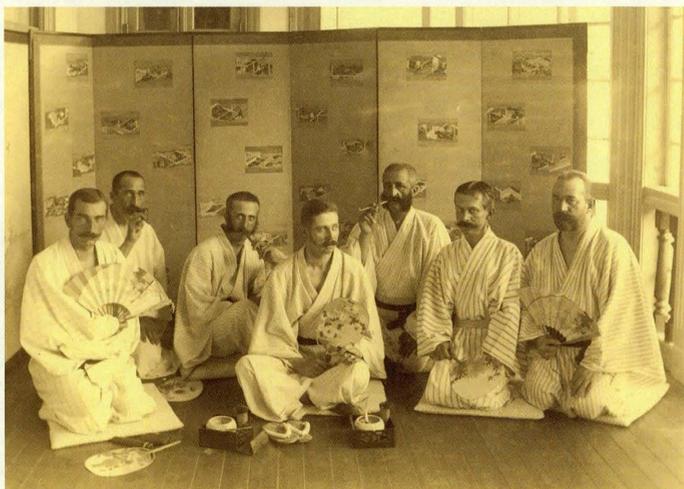


図8 フランツ・フェルディナント皇太子と随行員達の写真、日光、1893年頃
(個人蔵)

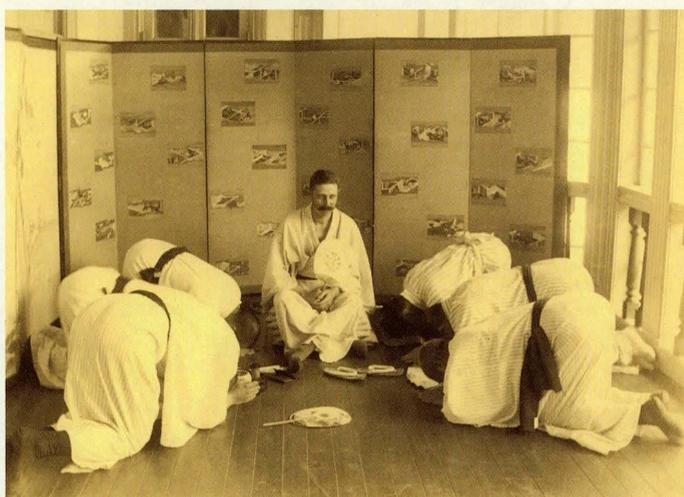


図9 同上(個人蔵)

岩倉使節団の旅

米国とヨーロッパ一カ国を訪問した有名な岩倉使節団は、二年間かけて各地を廻った。久米邦武がこの旅行中の出来事を綴った日誌は、道中初めて見聞した国々や人々の様子の描写を満載し

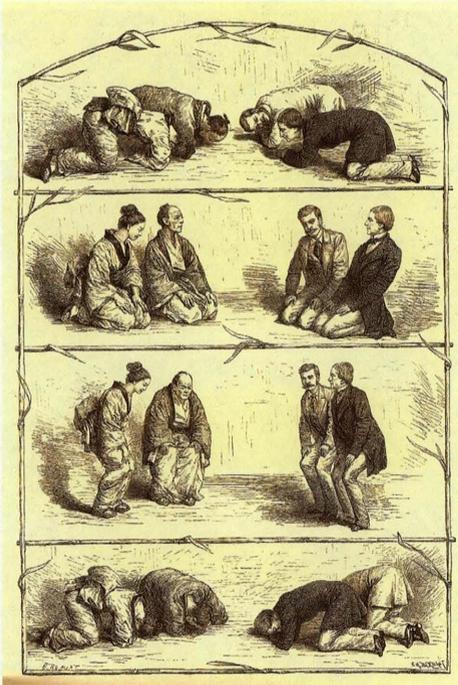


図10 Alexander von Hübner, "Ein Spaziergang um die Welt", Leipzig 1882, p.192

ている。

二〇〇二年、東京で岩倉使節団をテーマにした大きな学会があった。その最終日の公開シンポジウムで、岩倉具視およびその他日本人役人達の旅行中の性生活に関する情報はあるのだろうか、ある聴講者から質問が出た。男だけであつたし、それに二年間も独りで外国を廻っていたのだから……と。二、三〇人の岩倉関係研究家が出席していたもの、これに答えられる人は一人もいなかった。

使節団の日記にはハンブルクの遊郭見学に関する記述があるが、大変簡潔である。全行程において日課ともなっていた役所や博物館を見学した時のような書き方である。その点日本へ上陸した諸

国の水兵達は、何のためらいもなくこのテーマに触れている。『お菊さん』という、ピエール・ロティの本は全世界に知れ渡っている。何十年の間ベストセラーとなり、ヨーロッパ諸国の各国語に訳されて、日本女性の愛らしさと魅力を称えている。先ほどの絵葉書の話を思い出して欲しい。

『偽ロティの日本日記』

幾週間にもわたる航海の後、長崎、神戸、横浜に上陸できた時の喜びはいかほどだっただろう。日本は楽園のように見えた。ロティの船とほぼ同じ頃日本へやって来たオーストリア戦艦の乗組員達にとつてもそうだった。その船員達を、オーストリア公使のクーデンホーフ伯爵とその日本人妻光子が横浜港に停泊していた際に船上にて訪問している。しかし我々にとつて重要なのは一人の、素晴らしい日記を残した若き海軍少尉だ。個人の文化的出会いという点で見事な、また全く注目に値する記録である。彼にとつて長崎や横浜のお茶屋で過ごしたひとときは、浦島太郎が乙姫様の竜宮城で過ごした時のように素晴らしく夢のようだったに違いない。出版のタイトルはもう決まっています、『偽ロティの日本日記』だ。あとは出版社を見つければとまっている。

旅の一番の素晴らしさは、異なる文化に生きる人々の出会いだ。



図11 日本周遊中の外国人旅行者の写真（個人蔵）

どんなに美しい景色も、高価な美術品も、人々がうちとけて過ごす時間の前にはすべてが色あせてしまう。仲間同士でふざけ合い、旅先で振る舞われる料理や酒を堪能し、陽気な娘達が愛嬌を振りまくのに接する、お茶屋のひとつときは夢見た以上のものであっただろう（図11）。森鷗外の『舞姫』や『うたかたの記』を読めば、同じようなことが追体験できる。しかし他への憧れ、異質なものへの理解という点では、かの有名な福沢諭吉の若き日の写真がびつたりだ。サンフランシスコで船が日本へ向けて出帆する少し前に、写真家の娘と写っている写真である。

彼が渡米したのは幕末のことだったから、この写真の福沢諭吉はまだ丁髷を結っている。ヨーロッパへ派遣されたもう一つの外交節「文久使節団」にも彼は参加しているが、この時も同じだった。当時日本の外交官達は不平等条約の改正に漕ぎ着けることはできなかったが、東洋と西洋の出会いという点では非常に意味あることだった。ベルリンの風刺雑誌がベルリンっ子と日本人の出会いを描いているのを見るとすぐにわかるが、視線が同じ高さになっている。

「回歴ノ奇モ、亦極レリ」

ここでもう一度岩倉使節団に話を戻そう。近代日本にとって重

| | |
|------------|---------------------------|
| | 経験 |
| Experience | 行為によって分かる事 |
| Erfahrung | 乗ってきて分かる事 =乗り物によって得た知識 |

図12

した。公使は通訳にその動作の意味を尋ねた。通訳はドイツ人だったが、この質問に大変うろたえ、とっさにそれはオランダで最高の敬意を示す挨拶であると説明してしまつたのだ。そこまでは良かったのだが、これで片付いたわけではない。その翌日岩倉大使は国王に謁見した。国王を見るやいなや、大使と随行員達は前日子供達がしたように一斉にあかんべえをしたのである。

要な出来事であるというだけではなく、様々な文化の出会いという意味でまさに宝の山だったからだ。一八七一年一月二月に使節団が大世界へ向けて横浜から出発した。大旅行への小さな第一歩である。どれだけ長引くか、またどれだけだけの成果をもたらすのかもわからずに、楽観的に始まつた旅だった。今日振り返ってみれば成功と言えるものだったが、どんな旅にも起こり得るような小さな失敗がなかつたわけではない。

それはアムステルダムでのことだった。使節団は汽車で駅に到着し、待たせておいた馬車に乗る為広場に出た。そこには日本からの賓客をこの目で見ようと、物見高い人達が大勢集まつていた。

それ迄日本人を一度も見ることがないという子供達も沢山詰めかけていた。その子供達が公使に歩み寄つて、両手であかんべえを

国王がいかなる反応を示したかは表現しがたい。通訳は死ぬ程仰天し真つ青だったと後日語つたが、このハプニングを切り抜ける術も心得ていた。国王に向かって通訳は、このおかしな挨拶は日本に普及しているもので、特別敬意を示す表現であると説明したので。これを聞いて国王の顔色は和らぎ、彼自らも同じ動作で日本からの賓客に挨拶を返したとか。そして、宮廷仕えや貴婦人達もこれに倣つたようである。

今、岩倉使節団が鉄道でアムステルダム駅に到着したことについて述べたので、あと一ツだけ旅の魅力について話して終わりたい。ドイツ語で「経験」という単語は、「乗つて来てわかる事」という語源による(図12)。何世紀の間、人は馬車で旅したわけだが、馬車に乗るといふことは、少なくとも歩くよりも速く移動できるといふことを意味していた。それでもいろいろな見聞をふやす時間も充分にあつた(馬車から降り、馬を取り替え、また乗り、車輪の修理をする等)。乗り物に乗るといふことは極めて便利なことだった。先に名前を挙げたオーストリア外交官のヒュプナーが来日した頃、日本にはまだ鉄道はなかつた。駕籠で旅をしていた最後の時代である。それでも彼は別に文句も言っていない。同じ年に西洋へ旅行した岩倉使節団は、それ故にあちらで最新の交通手段に感激したのだろう。鉄道旅行の箇所は、日誌の中で最も興味深い部分である。ロシアードイツ間の旅を例にとると、鉄道で

移動することによって、春、冬、そしてまた春というように、四季の移り変わりを同時に体験できると記している。深く雪に埋もれていたかと思えば、翌日には蕾が見られ、それから咲きそろった花々の香りを嗅げるといふ具合だ。それもほんの数時間の差で「三日間二三春ヲ閱ス、凜車ノ快モ、亦極ルト謂フヘシ」⁴。

スカンジナビア往復の旅でも同じような感想を綴っている。短期間で同時にいろいろな季節に出会える可能性は、全く新しい経験だったのだ（やはり、乗って来てわかる事）。日本人観察者の結論はまたもや「回歴ノ奇モ亦極レリ」⁵であった。

「旅と魅力が同義語であることを疑う者がいるだろうか？」

注

- 1 *Neue Freie Presse* (『ウィーン日刊新聞』ウィーン、一九〇一年五月一日。八日。
- 2 同、ウィーン、一九〇一年五月一九日。
- 3 同、ウィーン、一九〇七年一月二三日。
- 4 『特命全権大使 米欧回覧実記』四(六六卷)、岩波文庫、一九八七年、一二五頁。
- 5 同、四(七〇卷)、二〇一頁。